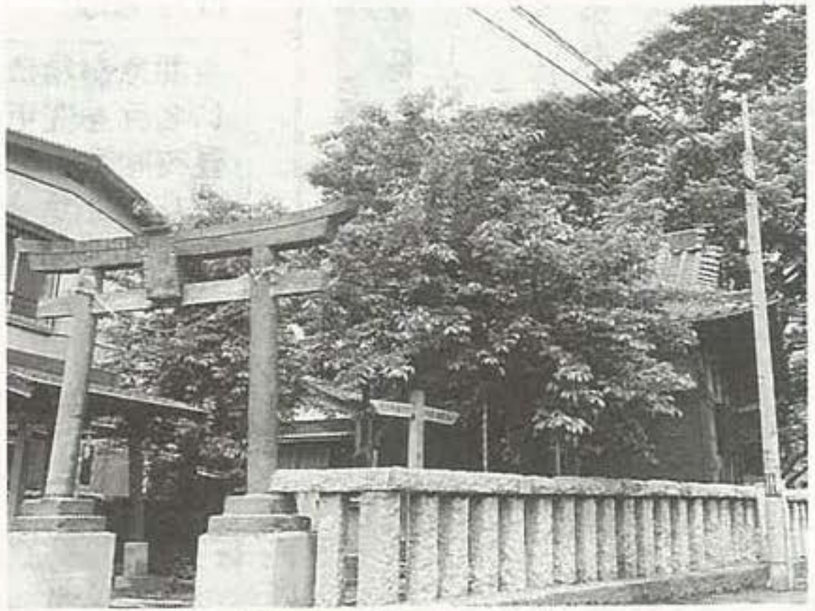
市川のまち 地名の由来

No.26

道が2つに分かれるところ

二　俣



日枝神社をはさんで道が２つに分かれている

二俣は、「二又」「二股」などとも書かれ、街道の分かれ道に付けられたものです。では、本市の二俣は、どこの分かれ道から起こったものでしょうか。

その昔、徳川家康が江戸から東金へ狩りに行くとき、行徳から船橋を通ったといい、その道の一部が現在でも「権現道」（家康のことを東照権現と讃えたところから付けられた）として伝えられています。この道は、今井の渡しから（寛永九年からは本行徳の新河岸が江戸からの船着場となった）、妙典、田尻、原木、二俣を経て、船橋から房総方面へと通じていました。当初は、房総に配置された諸大名の通路として使われ、後に江戸庶民の成田参詣路としてにぎわいました。

一方、小岩から江戸川を渡り、市川、八幡、中山を通って船橋に出る道（現在の国道14号線）は、三代将軍家光が参勤交代の制度を敷いて以後、房総諸大名の通路に指定されました。即ち、この江戸と房総を結ぶ二つの街道は、船橋で一つになったのです。これはまた、房総から江戸に入る道が、船橋で二つに分かれたともいえます。

さて、二俣の集落は、妙典、田尻を通る南の街道に沿ってつくられました。そして、市川、八幡を通る北の街道とを結ぶ道が、集落の入口で二又に分かれ、その集落の北はずれに日枝神社が建てられました。この日枝神社のところでも、南に向けて道が二又に分かれています。この北に向かっての分かれ道か、日枝神社から南に向かっての分かれ道か、とにかくどちらかの分かれ道が、集落の特色をなしていたものと思われ、それが二俣の地名の起こりになったのではないでしょうか。

二俣は、江戸時代から製塩が盛んに行われていましたが、大正六年の大津波以降は昔の面影もなく、塩田が田畑に変わっていきました。昭和三十六年、京葉道路が開通して原木インターチェンジが設けられ、同四十二年には、かつての塩田が農地として使われていた地域に、防衛庁を中心とした官舎が建設され、四十五年には二俣小学校が開校しました。また、六十三年には京葉線も開通しました。

昭和五十一年、京葉道路以北の地域に住居表示が実施されて、二俣一・二丁目となりました。

次回は「大和田」を予定しています。

◇

前回「北方」の記事の下段二十八～三十一行目を、「この北を指す子が子之神社に使われていることは」と改めます。

（社会教育指導員　綿貫喜郎）